



エモリー大学ローリンス公衆衛生大学院の前にて

り、再び海外の現場で働きたいと、WHO世界保健機関モリリシヤス事務所にてエイズ担当官として二年間働いた。この仕事を終えて日本に帰国、京都大学の博士課程に編入したのが、二〇〇一年四月のこと。一年目はコースワークで疫学や統計学の基礎をみっちりやり、二年目は、フィールド調査でモリリシヤスへ。そして迎えた三年目、長年の憧れだった、米国の公衆衛生大学院への留学の切符を手にしたのだった。

実際に、私が受講した講義は、次のと

おりである。「行動科学と健康教育の理論」「行動疫学」「行動手法」「応用行動研究手法Ⅰ」「応用行動研究手法Ⅱ」「公衆衛生とエイズ」「思春期の健康問題」「ソーシャルマーケティング」「カリキュラム編成と健康教育」である。いま、思い出して講義のタイトルを書いているだけでも、ワクワク、ゾクゾクしてくる。エイズにかかわってきた私には、人の健康と行動という課題に興味を持っていた人は、病気の予防のための手段を知っていても、実行できないことがある。それはなぜなのか。予防行動を促進するためには、どのようなアプローチが有効なのか。エモリー大学で、私が履修した講義は、そんな人の健康と行動についての課題に、理論、研究分析手法、介入アプローチ、そして具体的テーマをもって学び実践する場だったのだ。

講義受講と合わせ、博士論文をまとめる作業では、Diclemente教授に、定期的に分析方法や論文の書き方について指導していただいた。さらに、統計分野の先生の助言を得て、私が採用したサンプリング方法に合う分析が可能な統計ソフトを学ぶために、ノースカロライナ州の研究機関での研修会へ行ったりもした。

アトランタ在住でなければ、わざわざ新しいソフトを学びに行こうとは思わなかっただろう。論文は、留学期間の終わりに第一稿を投稿するに至り、ひとまず、所期の目的を達成したといえる。ただし、このモリリシヤス論文は、なかなか世に認めてもらうことができず、その後、投稿と書き直しを繰り返し、最終的に博士号を取得したのは二〇〇八年であった。

留学経験が心の支えに

現在、私は、淡路島にある関西看護医療大学で、講師として働いている。看護師を目指す学生さんに疫学や心理学概論を教えている。エモリー大学で出会った先生方の魅力的な講義を思い出し、少しでも自分も近づきたいと研鑽を続けている。また、私生活では、二人の男の子に恵まれ、仕事と子育てで、毎日が時間との戦いである。ふと、エモリー大学での日々を思い出すとき、二四時間が自分の時間で、刺激的な講義を受け、自分の調査のデータ分析に没頭したあの一年はなんと幸せだったのだろう、と心から思う。あの一年があるからこそ、いま、がんばれる。長年の夢だった留学は、いまの自分の心の支えとなっている。

憧れの米国公衆衛生大学院 で学んで

関西看護医療大学看護学部講師

西村由実子
にしむら ゆみこ

神戸大学文学部卒業。神戸大学文学研究科修了。博士(社会健康医学、京都大学)。青年海外協力隊員としてケニアへ派遣され、家族計画・エイズ予防教育に従事。WHOモリシヤス事務所にてアソシエイト・プロフェッショナルオフィサーとして約二年間勤務。二〇〇二―〇三年JICA准客員研究員、〇三―〇四年神戸海星女学院非常勤講師(この間、エイズ予防財団リサーチレジデント)等を経て、一〇年四月より現職。



▼片道二日をかけての東京日帰り

パスポートを開いてみると、二〇〇二年十二月三日モリシヤス出国、十二月七日入国という印がある。これは、奨学金選考の面接のために東京の国際文化教育交流財団を訪れた記録である。当時、私は、博士論文のためのフィールド調査で半年間インド洋の島国モリシヤスに滞在する予定だったが、通知に書かれていた面接日は、本調査に向けての予備調査を実施する一週間と重なっていた。モリシヤスから日本へは、乗り継ぎの関係で約二日かかる。東京日帰りのつもりでも、当地を五日ほどは離れなければな

らない。予備調査の重要な時期に責任者の自分が離れてよいのかと悩んだ。しかし、この留学のチャンスは絶対逃したくない、という強い気持ちに動かされ、東京滞在半日の強行スケジュールで、一時帰国したのである。面接を受けても奨学金をもらえる保証はなく、当時の自分にとっては、大きなかけだった。しかし、いま、あのときの決断は、正解だったと、確信している。

私が、米国アトランタにあるエモリー大学ローリンズ公衆衛生大学院へ留学したのは、二〇〇三年八月から二〇〇四年八月の一年間である。当時は、京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻の

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三十一カ国の大学・大学院へ一八三名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三十七カ国五一九名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

博士課程に属していて、論文執筆のためのフィールド調査を終えた後だった。この一年間の留学の目的は、二つ。まず、行動科学健康教育分野の講義を受けること。次に、自分の博士論文のためのデータ分析、論文執筆において、エイズ予防介入研究で高名なDiClemente教授の助言・指導を受けること、である。出発時三二歳だった私の、"オーダーメイド"な留学を可能にしてくれたのが、国際文化教育交流財団の奨学金制度だった。

▼人の健康と行動を科学する

米国のSchool of Public Health公衆衛生大学院へ行きたい、と私が思ったのは二〇代前半のことである。青年海外協力隊員としてケニアで活動するなかで、エイズの問題に直面し、人々の健康について社会的な側面からアプローチする専門家になりたいと思うようになった。その後、日本の大学院で社会学の修士号を取